

ラワン語ダル方言

大西 秀幸

1. はじめに

ラワン語ダル方言(以下ダル方言)には、連用修飾的複文を作るときに、動詞の形が変化して副詞的に機能する形式(副動詞)を使う場合と、叙述法動詞形(終止形)+接続助詞の組み合わせを使う場合がある。

副動詞形で連用節を作るか、接続助詞で連用節を作るかの違いは、ラワン語という言語の本質を知るうえで重要な問題であろう。即ち、述語を中心とした文の成り立ちの仕組みと同時に、話者の「世界認識のパターン」に深く関連していると考えられるからである。

類型論的立場から見ると、ラワン語は日本語をはじめとするいわゆるアルタイ型の言語と同様、連用的な接続形式が発達している一方で、定形の動詞(*finite verb*)を接続詞で繋ぐことが多い印欧語の特徴も見せる点で興味深い。本稿では特に、意味的によく似た事象が、連用的接続形式(副動詞)と、接続助詞のどちらで繋がれるのかを決める要因は何かということに注目して考察をしていきたい。

1.1. 本稿の目的及び取り扱う範囲

本稿は、アンケート項目に答える形でダル方言の連用修飾的複文に関して基礎的な記述を行うことを目的とする。今回は調査時間の都合上、「言いさし文」を調査するに至らなかったため、本稿で取り扱うのは、アンケート項目のうち連用節+主節から成る複文に関する箇所にとどまる。

1.2. ラワン語概略

ラワン語(*Rawang*)は、ミャンマー連邦共和国・カチン州(*Kachin state*)の北部でラワン人によって話されている言語である。ラワン語は、チベット・ビルマ語派(*Tibeto-Burman*)のうちヌン語群(*Nungish*)¹に属する言語である。ラワン語には100以上の方言があると

¹ ヌン諸語の系統的な位置づけについては諸説ある。シナ=チベット/チベット=ビルマ諸語におけるヌン諸語の系統関係について初めて指摘したのは、*Shafer (1955)*、*Benedict (1972)*であり、*ロロ=ビルマ諸語との関連を指摘している*。これらの研究に対し*Matisoff (2003)*は語彙の対応をもとに、ジンポー諸語やルイ諸語と合わせて*Jingpho-Nung-Luish (JNL)*というグループを提唱している。*Bradley (2002)*はアッサム州で話される*Mishmi*語などとともに中央チベット=ビルマ語グループをなすと指摘した。*Thurgood (2003)*は、人称接辞システムの存在に着目し中国四川省などで話される*rGyarong*語などとともに‘*Rung group*’を成すと指摘している。

いう指摘がある。筆者はすべての方言を確認したわけではない。ただし、筆者の経験によれば、方言話者同士が相互に意思疎通することが難しい場合もある。本稿で記述の対象とするのはダル方言である。筆者によるこれまでの調査でダル方言は次のような文法特徴を持つことがわかっている。

- 基本語順：SV, APV
- 語類：名詞類（名詞（普通名詞，指示詞，代名詞），数詞），動詞類（自/他動詞），副詞類（副詞），小辞類（助動詞，後置詞，類別詞など）
- 句構造（(...) で示したのは任意の要素）
- 名詞句構造：[(指示詞) +名詞 (+数詞) (=類別詞)] (=後置詞)
- 動詞句構造 (...) で示したのは任意の要素である。：[(否定辞-) (使役化-) 動詞語根 (=助動詞) (-TAM) -人称・数=副動詞形成接語/ =終止形形成接語]

1.3. 本稿で用いる音韻表記並びに略号

ダル方言の音韻転写には筆者の音韻解釈に基づいた表記を用いる。概略は以下の通りである。

- 子音

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖／破擦	p, b	t, d, ts, dz	tc, dz	k, g	?
摩擦	(ɸ, β)	s	ɕ		h
鼻音	m	n		ŋ	
その他	w	r, l	j		
- 母音

単母音	i, i, u, e, ə, o, a
弱化母音	ə
- 声調

高調	Á
中調	Ā
低調	à

※ (..) の子音は外来語にしか現れない音

※弱化音節の音節，及び末子音が閉鎖音の音節では声調の対立がなくなる。したがってこの種の音節には声調の記号を表記しない。なおダル方言本来語は常に中調になる。

また本稿で用いた略号は以下の通りである。

1		話し手人称	DUR	durative	継続
2		聞き手人称	EXHO	exhotative	非直接要求
3		第三者人称	F	feminine	女性
-		接辞境界	IMP	imperative	命令
+		同一名詞句内	LOC	locative	処格
		の語境界 (特に	M	muscline	男性
		示す必要のある場合のみ)	N1	non-1st person subject	非話し手が主語
=		接語境界	NEG	negative	否定
A	agentive	動作主	NPT	non-past	非過去
ACC	accusative	対格	OBLG	obligatory	義務
ALL	allative	向格	P	patient	被動者
AMB	ambitransitive verb	自他両用動詞	PFV	perfective	完結相
		語根	PUR	purposive	目的
CL	classifier	類別詞	R/M	reflexive/middle	再帰／中動
CLC	collective	集合	RES	resultative	順接
CNMLZ	clausal-nominalizer	名詞節化標識	SEQ	sequence	継起
COM	comitative	共格	SG	singular	単数
COND	conditional	条件	TOP	topicalization	話題化
COP	copula	コピュラ	V	verb	動詞語幹
CTRD	contradictory	逆接	VI	intransitive verb	自動詞語根
DIR	directive	方向	VT	transitive verb	他動詞語根

2. 連用節

従属節は主節とともに複文を形成する。従属節はその機能から、名詞節、連体節、連用節に分けられる²。

連用節を形成する手法は、動詞の副動詞形で示すものと、動詞の終止形と接続助詞の組み合わせで示すパターンの2つに大別される。

2.1. 副動詞による連用節

ダル方言ではその機能によって以下の2タイプの動詞形が想定できる。

² このうち、名詞節は統語的に名詞(句)と同等のふるまいをする。連体節は、名詞(句)を拡張する機能をもち、いずれも名詞化接辞によって形成される。

- ① 終止形：文の述語となり，文を終止する機能を持つ形．基本的に文末に位置し，（動詞文では）1文に1つある．
- ② 副動詞形：副詞と同様に他の動詞を修飾する形．主に従属節の述語となって主文にかかる．また，複合的な形式で動詞のアスペクトを表すこともある．
終止形と副動詞形の活用をまとめて以下に示す．

表 1：動詞の活用			グロス	
終止形	叙述	過去	無標	NPT
		非過去	V=ē	
	要求	直接要求	V=∅	IMP
		非直接要求	lā-V=∅	
	疑問	命題疑問	V=má	Q
		内容疑問	V=lé	
副動詞形	順接		V=dēr	RES
	逆接		V=dērgēr	CTRD
	継起		V=mēpāŋ	SEQ
	目的・意図		V=lóm	PUR
	移動の目的		V=nàŋ	[移動の目的]
	条件		V=dērnēr	COND
	その他（省略）			

終止形動詞は動詞語幹=終止形形成接語（文標識）によって形成される．副動詞形は，副動詞形成接辞が終止形形成接語と同じスロットを占めることで形成される．

2.2. 接続助詞による連用節

接続助詞による連用節は叙述文標識に接続助詞を後接させることで作られる．本稿で扱う接続助詞は以下に示す3つである．

順接，確定条件 =rəgap
理由 =təkáŋ
期間（～まで） =teáŋ

3. 調査方法

本稿では，コンサルタントにアンケート項目に回答してもらった形でダル方言のデータを

収集し考察を行う。また適宜、筆者が作成したコーパスからの例文を使っても考察を行う。コンサルタントのデータは以下の通りである。

性別： 男性
 生年： 1957
 出身： ミャンマー，カチン州，Putao 出身（父母がダル方言話者）
 学習経験のある言語： 日本語

コンサルタントは日本語が堪能であるため、調査は全編日本語を媒介にして行った。また本稿では、さらに筆者のコーパスデータからの用例も挙げている。コーパスはコンサルタントの語りを録音し、書き起こしてテキストデータ化したものである。

本稿で番号をふっている例文はアンケート番号と対応する。筆者のコーパスからの例文にはアルファベットをふっている。用例の文法性及び転写についてはコンサルタントとして協力していただいた Phong Dakhum 氏のチェックを受けているが、本稿に引用された例文（及びその説明）に対する責任の一切は筆者にある。

4. データ

4.1. 【同時動作】

- (1) 彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる。

àŋ=í	kàrəgap	lègā	eün-ù=ē=rəgap	ám-pà	ám-ù=ē.
3SG=A	いつも	読み物	読む.VT-3P=NPT=〜とき	食べ物	食べる.AMB-3P=NPT

同時動作の場合、接続助詞=rəgap を用いて「A するとき、B する」という表現を用いる。

4.2. 【継起的動作・物語的連鎖】

- (2) (私は) 昨日は 10 時に家に帰って、少しテレビを見て (から)、寝ました。

sānī	tíʔsəl=nāri	teúm=kaʔ	lō=dēr
昨日	10=〜時	家=ALL	帰る.VI=RES
tíʔhānṅān	tīβī	tsà-ù=dēr	jip.
少し	テレビ	見る.VT-3P=RES	寝る.VI

出来事が物語的に連鎖する場合、=dēr 連用節を用いる。

4.3. 【継起, 理由】

(3) (私は) 昨日階段で転んで, ケガをしてしまった.

sānī nāŋdūŋ=ta? əŋā-ŋ=dēr zàcì-ŋ.
昨日 階段=LOC 転ぶ.VI-1SG=RES 怪我をする.VI-1SG

2つの動作が継起的に起こるとき, 且つ前件が後件の順当な原因・理由になっているもの, あるいはいくつかの動作が物語的に連鎖していく場合は=dēr 連用節を用いる. =dēr 連用節が使えるのは同主語の複文に限られるようで, 異主語の複文では接続助詞を用いる (a) .

a) nā=í ŋà=səŋ è-gō=təkán ŋà dī-ŋ=ē.
2SG=A 1SG=ACC N1-呼ぶ.VT=RES 1SG 行く.VI-1SG=NPT
あなたが私を呼んだので, 私は (そこに) 行く.

=təkán は前件が後件の原因・理由にあたるような場合に用いられる接続助詞である. a) において前件を=dēr 連用節で言い換えることはできない.

4.4. 異主語

(4) 今日も父は会社に行って, 兄は大学に行った.

dèní=gèr kāmzèr=ka? dī. nòməlat tə?kəsū dī.
今日=～も 会社=ALL 行く.VI 兄 大学 行く.VI

異主語, 且つ2つの動作に継起的あるいは原因結果的な関係が認められない場合には, 連用節を用いることができず, 2文で表現するしかない. コーパスには b) のような例がある.

b) rəwāŋ-mè-rā ənāsī sī-cì=ē.
ラワン-F-CLC 女性用耳飾り 着る.VT-R/M=NPT
rəwāŋ-pè-rā nōmpù gí-cì=ē.
ラワン-M-CLC 男性用耳飾り 着る.VT-R/M=NPT
ラワン人女性は筒状の耳飾りを, ラワン男性はイヤリングをつけている.

4.5. 【付帯状況】

(5) (あの人は) 今日は帽子をかぶって歩いていた.

dèní əmó sī-cì=dēr əgūncì=dērəl.
昨日 帽子 帽子をかぶる.VT-R/M=RES 歩き回る.VI=DUR

結果状態の残った状況で主節の動作行為が行われる場合にも、=dēr 連用節を使うことができる。

4.6. 【並行動作】

(6) 本を読んだり、テレビを見たりしています。

lègā cūn-ù tīβī tsà-ù=ē
読み物 読む.VT-3P テレビ 観る.VT-3P=NPT

「A たり～B たりする」に対応する、動作を列挙して述べる場合、ダル方言では動詞句を列挙して表現する。(6)において、前件の「新聞を読む」は非過去なので、文を終止させるには叙述文標識=ēを用いなければならないが、=ēは後件の「テレビを見る」にしかついていない。つまり、(6)は2つの動詞句を列挙させた1文と考えられる。このような構文で表現できるのは、列挙する動作が同一主語の場合に限られる。異主語の動作を列挙する場合は、2文で表現することになる(4.4を参照されたい)。

4.7. 【理由・カラ】

(7) 時間がないから、急いで行こう。

rətér mə-ól=ē. sànsàn lā-è-dì=∅
暇 NEG-存在する.VI=NPT 急いで EXHO-N1-行く=IMP

後件に要求文が続く場合、必ず2文で現れる。この傾向は、コーパスで確認しても一貫している。例えば、以下のように、意味的に対応する接続表現での言い換えはできない。c) 'は接続助詞による表現、c) ''は=dēr 連用節による表現である。いずれも非文となる。

- c) jà=mē zənàn mənām sóm=ē dètē-ù=∅
この=CL プレスレット あまりにも 小さい.VI=NPT CAUS.N1.大きい.VI-3P=IMP
このプレスレットは小さすぎる。大きくして。
- c) ' *jà=mē zənàn mənām sóm=ē=təkáŋ dètē-ù=∅
この=CL プレスレット あまりにも 小さい.VI=NPT=RES CAUS.N1.大きい.VI-3P=IMP
(このプレスレットは小さすぎるから大きくして)。
- c) '' *jà=mē zənàn mənām sóm=dēr dètē-ù=∅
この=CL プレスレット あまりにも 小さい.VI=RES CAUS.N1.大きい.VI-3P=IMP
(このプレスレットは小さすぎるから大きくして)。

4.8. 【趨向／移動の目的】

- (9) あの人は本を買いに行った。

àŋ lègā dī=dēr wàn-ù.
3SG 読み物 行く.VI-RES 買う.VT-3P

「～しに行く」といった移動の目的を示す場合、=dēr 連用節を使って「行って～する」という表現をする。

移動の目的は=nàŋ 連用節を使っても表現できる。つまり「～するために行く」という言い方もできる。

- d) ŋà ein=nàŋ dī-ŋ=ē.
1SG 言う.VI= [移動の目的] 行く.VI-1SG=NPT

私は言いに行った。

- e) nəmbā sār gər wà=nàŋ səmā-rā eŋbè dī-ám.
耕地 新しく 耕す= [移動の目的] 女性-CLC すべて 行く-PFV
すべての女性は新たな耕地をきれいにするために、出払ってしまった。

-nàŋ 連用節は他の一般の目的節としては用いられないという特徴がある。つまり、=nàŋ は「移動の目的」を表す専用の形式である。

4.9. 【目的・意図】

- (10) (彼は) 外が良く見えるように窓を開けた。

təjjaŋeì=lóm sərĩmsàŋ pú-ù.
よく見える.VI-PUR 窓 開く.VT-3P

前件が後件の意図や目的になっている場合、前件は=lóm 従属節で表現される。コーパスからは以下のような例が得られた (g)。

- f) əmiədám=kèní tənèədám=ta? əl=lóm ətsĩl-jàŋ-ù.
PN=ABL 俗世=LOC 存在する.VI-PUR 動く.VI-RPST-3P
アメウダムの国 (神の国) から人間世界で住むために移った。

【理由・ノデ】

- (8) 昨日は頭が痛かったので、いつもより早く寝ました。

sānī əgókē=təkáŋ mægà jíp.
昨日 頭痛がする.VI=RES 早く 寝る

原因・理由, 且つ後件に要求文以外の文が続く環境では, 前件の従属節は接続助詞=təkánj で示される. コーパスからの用例も合わせて示しておく.

- g) dàməà mə-í-ŋ-ù=təkánj mə-gíp mə-rəl-ù.
 シャーマン NEG-COP.VI-1SG-3P=RES NEG-覆う.VT NEG-思い出す.VT-3P
 私はシャーマンではない(頭がよくないので)ので, 思い出せません.

4.10. 【恒常的条件】

- (11) ここでは夏になると, よく雨が降ります.

jàmà=nēr nòmłĩmɛəlà gəzā sèrwà=ē
 ここ TOP 夏 非常に 雨が降る.VI=NPT

ラワン語では季節や曜日に関する表現は副詞として用いられるため, 夏を名詞項として表現する「夏になる」に対応する表現はできない. 恒常的条件は接続助詞=rəgap によって示される. コーパスからは次のような恒常的条件に関する文が得られた (h).

- h) nòmàŋjéŋ=ē=rəgap nəm gəzā gèŋ=ē.
 一日のうち最も暑い時間帯になる.VI=NPT=～とき 太陽 非常に 日差しが強い.VI=NPT
 一日のうち最も暑い時間帯になると, 日差しはととも強くなる.

条件は=děrnēr によっても示されるが (4.14 参照), =děrnēr 節に比べ, =rəgap 節の方が条件の頻度が高い傾向にある.

4.11. 【確定条件・生起】

- (12) 窓を開けると, 冷たい風が入って来た.

səŋĩsàŋ pú-ù=ē=rəgap nəmbīŋ+kit dī-làn
 窓 開ける.VT-3P=NPT=～とき 窓+冷たい 行く.VI-DIR

(12) は前件, 後件ともに成立済の事象であり, 条件は=rəgap で示される.

4.12. 【確定条件・発見】

- (13) 坂を上ると, 海が見えた.

ŋà əŋəŋlàn=ē=rəgap bəŋlāy ətān.
 1SG 坂をのぼる.VI=NPT=～とき 海 見える.VI

後件が発見であっても, 前件が既に成立した事象であれば=rəgap で示される.

4.13. 【仮定条件】

- (14) 明日雨が降ったら、私はそこに行かない。

napní sèrwà=dērnēr ḡà mǝ-dì.
明日 雨が降る.VI=COND 1SG NEG-行く.VI

前件が未成立の事柄であれば、=dērnēr 連用節で示される。

4.14. 【反実仮想】

- (15) もっと早く起きればよかったなあ。

tè mǝgà kòŋ-èi=dērnēr tè eǝlā=ē.
もっと 早く 起きる.VT-R/M=COND もっと よい.VI=NPT

反実仮想であっても、前件が不成立であることには変わらないため=dērnēr 連用節で示すことができる。これは前件否定でも同様である（(16)）。

4.15. 【反実仮想・前件否定】

- (16) あんなどころに行かなければよかった。

kùmà=ta? mǝ-dì=dērnēr tè eǝlā=ē.
そこ=ALL NEG-行く=COND もっと よい.VI=NPT

反実仮想の場合、後件に tèeǝlā=ē 「よりいい」という表現が用いられる。以下はコーパスから得られた例である。

- i) kandök kàmzèr=ta? ũŋ eìn=dērnēr tè eǝlā=ē.
役人=ACC 最初に 言う.VI=COND もっと よい.VI=NPT
最初に役人に言えばよかったのに（役人は中国に行ってしまった）。

4.16. 【一般的真理】

- (17) 1に1を足せば、2になる。

tí?=nàŋ tí? zat-ù=dērnēr əní í=ē.
一=COM 一 足す.VT-3P=COND 二 COP.VI=NPT

4.17. 【仮定条件+働きかけのモダリティ】

- (18) 駅に着いたら電話をしてください。

būdā=ta? həl=dērnēr φón lā-è-wà=∅.
駅=ALL 着く.VI=COND 電話 EXHO-N1-作る/する.AMB=IMP

後件のモダリティにかかわらず、前件が未成立であれば=dǝrnǝr 条件節を用いることができることがわかる。

4.18. 【仮定条件+願望】

(19) 日曜日になったら、みんなで公園に行きたいなあ。

lɔ̀bànní ɛəŋbè=nàŋ nàmpān= ta? dī-məjì-ŋ=ē=á.

日曜日 すべて=COM 公園=ALL go.VI- [願望] -1SG=NPT= [詠嘆]

願望のモダリティはモダリティの接辞 məjìによって示される。前件は副詞としてしか表現できない（(10)を参照）。コーパスからはj)の例が得られた。

j) məjènà tu?ŋ=ē=rəgəp ərá-məjì-ŋ=ē.

ミッチーナ 着く.VI-1SG=NPT=〜とき 仲良くなる.VI- [願望] -1SG=NPT

ミッチーナについたら（彼と）仲良くなりたい。

4.19. 【心配】

(20) 明日雨が降ったら困るなあ。

napní sérwá=dǝrnǝr rəzà=ē=só

明日 雨.VI=COND 困る.VI=NPT= [詠嘆]

前件の事象の成立を心配しているような文脈では、前件は=dǝrnǝr 連用節で示される。

4.20. 【時間的前後関係に則していないナラ条件文】

(21) 家に来るなら、電話をしてから来てください。

teúm=ta? è-dī-làŋ=dǝrnǝr fón

家=ALL N1-行く.VI-DIR=COND 電話

è-wà-mēpāŋ è-dī-làŋ=∅.

N1-作る/する〜のあと N1-行く.VI-DIR=IMP

時間的前後関係が逆転していても、前件は=dǝrnǝr 連用節で示すことができる。コーパスからはk)の例が見つかった。

k) nūŋŋā zì-rà=dǝrnǝr ùŋká ŋàdāŋ dəsà-rà=ē.

Cattle give.VT-OBLG=COND 最初 十字架 植える.AMB-OBLG=NPT

家畜を（生贄として）差し出さなくてはならなくなったら、最初に犠牲の十字架を地面に立てなければならない。

4.21. 【予想を伴った条件文】

(22) [もうすぐベルが鳴るので] 鳴ったら, 教えてください.

dūm=dēmēr è-cìn=∅
ベルが鳴る.VI=COND N1-言う.VI=IMP

予想を伴っているとはいえ, 前件の事象は未成立であるため, この場合=dēmēr 連用節で示される. 予想を伴うか伴わないかにかかわらず, 前件の事象が未成立であれば, =dēmēr 連用節が用いられる. (23) と対照されたい.

4.22. 【予想を伴わない条件文】

前件が予想を伴うか伴わないかにかかわらず, =dēmēr 連用節が用いられる. (22)と(23)は全く同じ文で表現できる.

(23) もしベルが鳴ったら, 教えてください.

dūm=dēmēr è-cìn=∅
ベルが鳴る.VI=COND N1-言う.VI=IMP

4.23. 【アクチュアルな逆接】

逆接は=dērgēr 連用節によって表現される.

(29) このリンゴは高かったのに, ちっとも甘くない.

jà=lòŋ mǎgosí=nēr əpī=dērgēr mǎ-zù=ē.
これ=CL りんご=TOP 高い.VI-CTRD NEG-甘い.VI=NPT

4.24. 【逆接3】

異主語の場合, 後件の文では主語が明示される. 主語が明示されなければ (あるいは文脈から明らかかな場合は) 同主語として解釈されるようである³.

(30) ŋà=í àŋ=sàŋ zì-ŋ-ù=dērgēr àŋ mǎ-tap-ù=ē.
1SG=A 3SG=ACC 与える.VT-3P=CTRD 3SG NEG-受け取る.VT-3P=NPT
私は彼にそれを渡そうとしても, 彼は受け取らなかった.

³ 厳密にいうと, 動詞の人称一致で主語を同定できる場合もあるが, 動詞の一致だけでは情報量が少ないと感じるのか, 従属節と主節で異主語の場合, 普通の発話では主節で主語名詞句を明示する.

4.25. 【時間的制限 1】

「～まで」という期間を表現する場合は接続助詞の=tcáŋ を用いる。

- (31) 彼が来るまで、これを持っています。

àŋ lō=ē=tcáŋ gál-ù=ē.
3SG 帰る.VI=NPT=～までに 持つ-3P=NPT

4.26. 【時間的制限 2】

- (32) あの人があるまでに、食事を作っておきますよ。

àŋ həl mǎ-ēī=rəgap ŋà=í kit-ù-nà í=ē.
3SG 着く.VI NEG-終わる.VI=～とき 1SG=A 料理する.VT-3P-CNMLZ COP.VI=NPT

「～までに」という期限を表現する場合は V+ mǎ-ēī=rəgap という複合的な表現を用いる。mǎ-ēī=rəgap は動詞との複合形式でも現れ、それ自体が項をとることもできる (1)。

- l:) cəlǎbəlì mǎ-ēī=rəgap àŋ-niŋ wà-dàŋ-nà í=ē.
月 NEG-終わる.VI=～とき 3SG-PL 作る/する.AMB-PFV-CNMLZ COP.VI=NPT
月が終わるまでに、彼らは仕事を終えなければならない。

参考文献

- Benedict Paul K. 1972. *SinoTibetan: a conspectus*. New York: Cambridge University Press.
Bradley, David. 2002. “The Subgrouping of Tibeto-Burman”. in Beckwith, Chris; Blezer, Henk, *Medieval Tibeto-Burman languages*, BRILL: pp. 73–112.
Thurgood, Graham. 2003. “A subgrouping of the SinoTibetan languages”. in Thurgood, Graham & LaPolla, Randy J., *Sino-Tibetan Languages*. London. Routledge: 3-21.
Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley. Los Angeles and London: University of California Press.
Shafer, Robert. 1955. “Classification of the Sino-Tibetan languages”. *Word (Journal of the Linguistic Circle of New York)* 11 (1): pp. 94–111.